

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まった夜のこ
と、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外でだれかがわが名を呼ん
でいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を
招く。覚え、自分は声を追うて走りだした。aムガムチュウで駆け
ていくうちに、いつしか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は
左右の手で地をつかんで走っていた。なにか体じゅうに力が満ち満ち
たような感じで、軽々と岩石を跳び越えていった。気がつくと、手先
やひじのあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷
川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となつていた。自分は初め目を
信じなかった。次に、これは夢にちがいないと考へた。夢の中で、こ
れは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあ
つたから。どうしても夢でないと思へばならなかつた時、自分は茫
然とした。そうして懼れた。全く、どんなことでも起こりうるのだと
思うて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになつたのだろう。わ
からぬ。全く何事も我々にはわからぬ。①理由もわからずに押しつけ
られたものをおとなしく受け取つて、理由もわからずに生きていくの
が、我々生き物のさだめだ。自分はすぐに死を思ふた。しかし、その
時、目の前を一匹のうさが駆け過ぎるのを見た。とたんに、自分の中
の人間はたちまち姿を消した。再び自分の中の人間が目を見ました時、
自分の口はうさぎの血にまみれ、あたりにはうさぎの毛が散らばつて
いた。これが虎としての最初の経験であつた。それ以来今までにどん
な所行をし続けてきたか、②それはどうして語るに忍びない。ただ、
一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還つてくる。そういう時には、
かつての日と同じく、人語も操れれば、複雑な思考にも堪えうるし、
經書の章句をそらんずることもできる。その人間の心で、虎としての
己の**bザンギヤク**な行いの跡を見、己の運命を振り返る時が、最も情
けなく、恐ろしく、**cイキドオ**ろしい。しかし、その、人間に還る数
時間も、日を経るにしたがつてしだいに短くなつていく。今までは、

どうして虎などになつたかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が
ついてみたら、おれはどうして以前、人間だったのかと考へていた。
これは恐ろしいことだ。いま少したてば、おれの中の人間の心は、獣
としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまふだろう。ちようど、
古い宮殿の**d礎**がしだいに土砂に埋没するように。そうすれば、しま
いにおれは自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日の
ように途で君と出会つても故人と認めることなく、君を裂き食らうて
なんの悔いも感じないだろう。いったい、獣でも人間でも、もとは何
かほかのものだつたんだろう。初めはそれを覚えていたが、しだいに
忘れてしまい、初めから今の形のものだつたと思ひこんでいるのでは
ないか？ いや、そんなことはどうでもいい。おれの中の人間の心が
すっかり消えてしまえば、恐らく、③そのほうが、おれはしあわせに
なれるだろう。だのに、おれの中の人間は、そのことを、このうえな
く恐ろしく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐ろしく、哀し
く、せつなく思っているだろう！ おれが人間だつた記憶のなくなる
ことを。この気持ちはだれにもわからない。だれにもわからない。お
れと同じ身の上になつた者でなければ。ところで、そうだ。おれがす
っかり人間でなくなつてしまふ前に、一つ頼んでおきたいことがある。
袁彦はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞き入つ
ていた。声は続けて言う。

ほかでもない。自分は元來詩人として名を成すつもりでいた。しか
も、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至つた。かつて作るところ
の詩数百編、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在ももは
やわからなくなつていよう。ところで、そのうち、今もなお記誦せる
ものが数十ある。これをわがために伝録していただきたいのだ。なに
も、これによつて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知
らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着し
たところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、④死んでも死
にきれないのだ。

袁彦は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に従つて書きとらせた。李

徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十編。格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁倬は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないかと。

旧詩を⑤吐き終わった李徴の声は、⑥突然調子を変え、自らをあざけるがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身となり果てた今でも、おれは、おれの詩集が長安風流人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。笑ってくれ。詩人になりそこなつて虎になつた哀れな男を。（袁倬は昔の青年李徴のe自嘲癡を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の思いを即席の詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

袁倬はまた下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

隅因狂疾成殊類、災患相仍不可逃。
今日爪牙誰敢敵、當時声跡共相高。
我為異物蓬茅下、君已乘軺氣勢豪。
此夕溪山對明月、不成長嘯但成嗥。

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に曉の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

（中島敦『山月記』より）

問一 波線部aとeについて、漢字はその読みを平仮名で答え、カタカナは漢字に書き改めよ。

問二 二重傍線部「肅然」の意味として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 急に信じがたく不思議に思う様子
イ 重苦しい雰囲気で沈んでいる様子
ウ 悲しみに静まりかえっている様子
エ 真剣に受け止めかきこまった様子
オ あれこれ悩みとりとめのない様子

問三 傍線部①「理由もわからずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由もわからずに生きていくのが、我々生き物のさだめだ」に込められた李徴の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 虎に変わってしまったという運命を受け入れつつ、少しでも人間の心を失うまいと力強く立ち向かう気持ち。
イ 虎に変わってしまったという運命を受け入れることができず、思考を止めてしまう境地に陥ろうとしている気持ち。
ウ 虎に変わってしまったという運命を、驚き懼れながらも結局は受け入れざるを得ないという悲しいあきらめの気持ち。
エ 虎に変わってしまったという運命に苦しみながらも、自分の犯した罪を償うためであると冷静にとらえようとする気持ち。
オ 虎に変わってしまったという運命に至った今、生きる意味を見いだすために苦悩し続けることを受け入れようとする気持ち。

- 3 -

問九 傍線部⑥「突然調子を変え」とあるが、それはなぜか。「虎になつたにもかかわらず、くくとに気づいたから。」という文脈につながるように、その理由を二十字以内で二つ答えよ。

【下書き用】

[illegible]

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

なぜこんな運命になったかわからぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、おれは努めて人との交わりを避けた。人々はおれを倨傲だ、尊大だと言った。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の **a** キサイといわれた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。おれは詩によつて名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わつて切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといつて、また、おれは俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、わが臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。己の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかった。おれはしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつてますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間はだれでも猛獣使であり、その猛獣にあたるのが、各人の性情だという。おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これがおれを損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、おれの外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、全く、おれは、おれのもつていたわずかなばかりの才能を **b** クウヒしてしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短いなど口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦をいとう怠惰とがおれのすべてだったのだ。おれよりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎となり果てた今、おれはようやくそれに気がついた。それと思うと、おれは今も **①** 胸をやかれるような悔いを感じる。おれにはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、おれが頭

の中で、どんな優れた詩を作ったにしろ、どういう手段で発表できよう。まして、おれの頭は日ごとに虎に近づいていく。どうすればいいのだ。おれのクウヒされた過去は？ おれはたまたまなくなる。そういうとき、おれは、向こうの山の頂の巖に上り、空谷に向かつてほえる。この胸をやく悲しみをだれかに訴えたいのだ。おれは昨夕も、あそこで月に向かつてほえた。だれかにこの苦しみがわかつてもらえないかと。しかし、獣どもはおれの声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も木も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、たけつているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、だれ一人おれの気持ちをわかつてくれる者はない。ちやうど、人間だったころ、おれの **②** 傷つきやすい内心をだれも理解してくれなかったように。おれの毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の間を伝つて、どこからか、曉角が悲しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が) 近づいたから、と、李徴の聲が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それはわが妻子のことだ。彼らはまだ號略にいる。もとより、おれの運命については知るはずがない。君が南から帰つたら、おれは既に死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。 **A** あつかましいお願いだが、彼らの孤弱を憐れんで、今後とも道塗に **c** 飢凍することのないように計らっていただければ、自分にとつて、恩幸、これに過ぎたるはない。

言い終わつて、叢中から **B** 慟哭の聲が聞こえた。袁もまた涙を浮かべ、喜んで李徴の意に添いたい旨を答えた。李徴の聲はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻つて、言った。

本当は、まず、このことのほうを先にお願ひすべきだったのだ、おれが人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁慘が嶺南からの帰途には決してこの途を通らないでほしい、そのときには自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、こちらを振り返って見てもらいたいの。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。わがdシユウ阿克な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないためであると。

袁慘は叢に向かつて、e懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中から、また、堪ええざるがごとき悲泣の聲が漏れた。袁慘も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出発した。

一行が丘の上に着いた時、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

(中島敦『山月記』より)

問一 波線部aとeについて、漢字はその読みを平仮名で答え、カタカナは漢字に書き改めよ。

問二 二重傍線部A「あつかましい」B「慟哭」の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

A 「あつかましい」

ア 包み隠さず明白であること

イ ずうずうしく遠慮がないこと

ウ 厳格すぎて窮屈に感じること

エ 改まって真面目ぶっていること

オ あまりに急で突拍子もないこと

B 「慟哭」

ア 周囲に聞こえないよう声を押し殺して泣くこと

イ 心が騒ぎ立ち無意識に声を上げること

ウ 悔しさをこめて大声で叫ぶこと

エ 悲しみのあまり大声をあげて泣くこと

オ 自分自身を責め立てて怒りをあらわにすること

